

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

## 主論文の要旨

論文題目 現代日本語における程度副詞の研究

氏名 疏蒲 剣

## 論文内容の要旨

本研究は現代日本語における程度副詞について考察したものである。程度副詞は文中の形容詞的な成分を修飾し、それが表す程度を限定する表現である。しかし、同じ程度副詞といっても様々な種類がある。たとえば、次の(1)に示すように、「とても」も「かなり」も太郎の身長の高さを限定し、通常程度の「背が高い」よりも高いということを表している。

(1) 太郎は {とても/かなり} 背が高い。

しかし、次の(2)と(3)では、「かなり」は使用できるのに対し、「とても」は使用できない。

(2) では、「かなり」は太郎が飲んだお酒の量を限定し、その量が多いことを表している。(3)では、「かなり」は太郎と次郎の身長差を限定し、その差が大きいことを表している。

(2) 太郎は {\*とても/かなり} お酒を飲んだ。

(cf. 太郎は {とても/かなり} たくさんお酒を飲んだ。)

(3) 太郎は次郎より {\*とても/かなり} 背が高い。

このように、「とても」も「かなり」も程度を表すものとされているが、その程度の限定の仕方に違いが見られる。森山(1985)や仁田(2002)は上の(2)における「とても」と「かなり」の違いを程度副詞が修飾する成分の意味特徴に求め、「とても」のような程度副詞を「純粹的」な程度副詞、「かなり」のような程度副詞を「量的」な程度副詞としている。一方、渡辺(1990)は上の(3)における「とても」と「かなり」の違いを程度副詞の構文の特徴に求め、「とても」のような程度副詞を「発見系」、「かなり」のような程度副詞を「比較系」としている。本研究では、これらの違いは文の比較基準の違いによると考える。そのため、比較の基準を「他者基準」、「範囲基準」、「時空基準」、「過去基準」、「平均基準」、「感覚基準」、「計量基準」、「全体基準」の8つに分けて、程度副詞40語との共起可能性を見た。その結果、比較の対象と比較の基準との関係の違いにより、程度副詞を「もっと」類、「最も」類、「ずっと」類、「かなり」類、「少し」類、「とても」類、「極めて」類、

「ほとんど」類、「完全に」類、「少しも」類、「あまり」類の11種類に分類した。これにより、従来の研究で言及されている被修飾成分の意味特徴や程度副詞が現れる構文の特徴などを比較という統一した視点から分析することが可能となることを指摘した。さらに、本研究では11種類のうち、意味や用法が類似しているものについてその違いを考察した。本研究の構成は次のとおりである。

第1章では本研究の目的を説明した上で、程度副詞の境界、程度副詞同士の違い、これまでの程度副詞の分類について論じた。さらに、本研究の程度副詞の分類を提示した。

第2章では、副詞の定義、程度副詞の境界、程度副詞の下位類について先行研究を概観した。程度副詞は従来様々な観点から分類されており、その分類基準は大きく3つのタイプに分けられる。1つ目は程度副詞の被修飾成分の性質によって程度副詞を分類するタイプである。森山(1985)、仁田(2002)、北原(2013)は、程度副詞の被修飾成分について、「(お酒に)強い」のように属性を表す形容詞的なものと、「(お酒を)飲んだ」のように動作を表す動詞的なものに分け、形容詞的なものを修飾する程度副詞は程度を限定し、動詞的なものを修飾する程度副詞は量を限定するとして、「とても」のような程度しか限定しない程度副詞と、「かなり」のような程度も量も限定できる程度副詞とを区別している。2つ目は程度副詞が現れる構文の特徴によって程度副詞を分類するタイプである。渡辺(1990)は比較のヨリ格がある文を比較構文、比較のヨリ格がない文を計量構文とし、比較構文に現れる程度副詞を「比較系」、比較構文に現れない程度副詞を「発見系」に分類している。3つ目は上の2つのタイプの分類方法を融合させたタイプである。中山(1996)は程度副詞がもつ程度の基準により、程度副詞を、「絶対程度副詞」、「極限的程度副詞」、「関係的程度副詞」、「量的程度副詞」に分けている。また、田和(2011)は程度副詞を「程度系」、「量系」、「比較系」に分けている。これらの研究を受け、本研究では程度と量、比較と非比較といった分類を「比較基準」という視点から考察するため、3つ目のタイプの分類基準を用いることを主張した。

第3章では、程度副詞が現れる文における比較というものについて論じた。その結果、「他者基準」、「範囲基準」、「時空基準」、「過去基準」、「平均基準」、「感覚基準」、「計量基準」、「全体基準」の8つの比較基準が存在することを指摘した。他者基準とは比較対象以外の事物を比較基準として、比較のヨリ格などで明示されるものである。範囲基準とは比較対象が属する集合を基準とするものとして、「～で」という形で明示されるものである。時空基準とは相対的な空間位置や時点を決めるための参照点を基準として、文中には明示されなくてもよいものである。過去基準とは過去の比較対象自身を基準として、文中には明示されなくてもよいものである。平均基準とは比較対象が属する集合の平均値を基準として、文中には明示されないものである。感覚基準とは話し手が五感や感情を感じる最小識別量を基準として、文中には明示されないものである。計量基準とは動作に関わる量を測るために単位量を基準として、文中には明示されないものである。全体基準とは量の全体すなわち100%を比較基準とするものであり、文中には明示されない。また、この8つの比較基準は、先行文脈あるいは文中に現れるかどうかによって、明示的な比較、含意的な比較、潜在的な比較の3種類に分けられる。明示的な比較では比較対象以外の何らかのものを比較基準にしており、それを明示する必要がある。明示的な比較に含まれる比較基準(他者基準、範囲基準)は比較対象以外

の何らかのものである。一方、含意的な比較では比較基準が文に含意されているため、それを明示する必要がない。含意的な比較に含まれる比較基準（時空基準、過去基準）は先行文脈や文中の成分で示されなければ、文の視点や聞き手の常識によって補完される。また、潜在的な比較では暗黙の了解を比較基準にしているため、比較基準は明示されない。潜在的な比較に含まれる比較基準（平均基準、感覚基準、計量基準、全体基準）は、比較対象を評価・計量するために用いられる暗黙の基準である。

第4章では、前章で論じた8つの比較基準を用いて程度副詞を「もっと」類、「最も」類、「ずっと」類、「かなり」類、「少し」類、「とても」類、「極めて」類、「ほとんど」類、「完全に」類、「少しも」類、「あまり」類の11種類に分類し、各種類の程度副詞の意味特徴と構文の特徴について比較基準の観点から論じた。明示的な比較のみで使われる程度副詞には「もっと」類と「最も」類がある。「もっと」類は他者基準の文にしか用いられず、「最も」類は範囲基準の文にしか用いられない。潜在的な比較のみで使われる程度副詞には、平均基準の文で使われる「とても」類と「極めて」類、全体基準の文で使われる「ほとんど」類、「完全に」類、「少しも」類がある。明示的な比較でも含意的な比較でも使われる程度副詞には「ずっと」類がある。潜在的な比較と含意的な比較で使われる程度副詞には「あまり」類がある。明示的・含意的・潜在的な比較で使われる程度副詞には「かなり」類と「少し」類がある。このように、11種類の程度副詞について比較基準別に意味記述を行った。

第5章では、「ずっと」類と「もっと」類、「とても」類と「極めて」類、「かなり」類と「少し」類、「少し」類と「あまり」類を取り上げて、その意味と構文の違いを明確にすることによって、比較基準による程度副詞の分類の合理性を検証し、程度副詞の意味の複雑性も示した。その上で、程度には「評価型」、「達成型」、「配列型」の3種類が存在することを論じた。

第6章では本研究の成果をまとめ、残された課題について述べた。

以上のように、本研究では程度副詞が現れる文に存在する比較基準を用いて、従来の研究で用いられた複数の視点を比較という枠組みに収め、程度副詞の意味について新たに見直すことができた。程度副詞は比較対象と比較基準との関係を示す表現として用いられるため、程度副詞の下位類の違いも比較のあり方の違いで説明できることを主張した。